

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）  
概要書

越境的活動が成人の  
自律的なライフキャリア発達に与える影響  
Impact of Cross-Border Activities on  
Autonomous Life Career Development for Adults

2022 年 1 月

早稲田大学大学院 人間科学研究科  
広瀬 由美子  
HIROSE, Yumiko

研究指導担当教員： 向後 千春 教授

# 越境的活動が成人の自律的なライフキャリア発達に与える影響

## Impact of Cross-Border Activities on Autonomous Life Career Development for Adults

広瀬 由美子 (HIROSE, Yumiko) 指導：向後 千春

### 1. はじめに

人生 100 年時代を迎え、個人は生涯にわたる学びとライフキャリアを個と社会の側面から統合的に捉えていく必要がある。その支援には「省察」「市民性」が鍵となると考えられる。本論文は、成人の自律的なライフキャリア発達を目指し、越境的な相互作用が省察を促すことを明らかにすることで、生涯学習のあり方とそれを踏まえたライフキャリア支援の方法を検討するものである。

近年、企業・組織という境界の内外でなされるバウンダリーレスな学習環境に着目した研究への注目が高まってきている。また、自律的なライフキャリアには、職場内にとどまらず、越境的活動や社会参加を含めた生涯学習が求められる。生涯学習の場では、知識やスキルを身につけるといふこと以上に、「新しい経験に開かれた姿勢」や互いに「成長を促す関係性」がアイデンティティの発見を促し、ライフキャリア発達につながるような環境や支援が重要である(図 1)。越境的活動や社会参加の重要性は従来の研究においても指摘されてきた。しかしながら、どのような活動が個人の成長を促すかについては明確にされてこなかった。また、企業で働く個人のキャリア形成について学習に着目した研究は少なく、学習に関する研究においてもその多くは組織での仕事経験に関するものであった。

そこで、本論文では、成人を対象に学習、および越境的活動に対する意識・行動の実態からライフキャリア学習プログラムを開発し、その実践・評価をとおして越境的な相互作用が省察を促す効果を検討した。そのため、本論文では以下の 3 点を明らかにすることを目的とした。

- 1) 越境的活動関与者は学習に対してどのような意向があり、行動をとっているのか(研究 1)
- 2) 越境的活動に関与する人ほど、ライフキャリア発達が促進されているのか(研究 2)

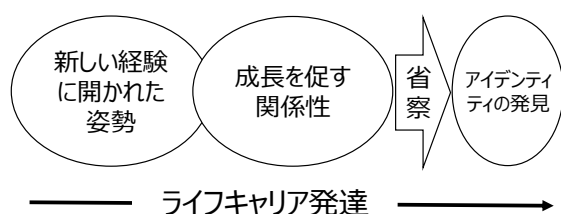


図 1 生涯学習の場に求められる環境

- 3) ライフキャリア学習プログラムをとおして、越境的な相互作用は個人の省察を促進するのか(研究 3)

### 2. 越境的活動関与者の学習に対する意識と行動(研究 1)

越境的活動関与者がどのような意識で学習を捉え、個人的・社会的側面のバランスを図ろうとしているのかを明らかにするため、オンライン調査を行った。対象は地域活性化と個人のライフデザインをテーマに活動する実践共同体に関与する成人とし、2 つの仮説を立てた。一つ目の仮説は、対象者の学習に対する意識には実践共同体の学習メカニズムである「非規範的視点」や「学習市民性」が影響している。二つ目は、過去の経験を自身の成長として表出できる人は、自身に合った学習志向があり、心理的 well-being (以下、PWB とする)が高いと仮定した。学び直し促進要因の探索的因子分析の結果、「地域・社会へ貢献」「人脈・仲間づくり」「仕事スキル向上」が抽出された。「地域・社会へ貢献」は社会的学習システムに参加しながら獲得するアイデンティティとされる「学習市民性」に、「人脈・仲間づくり」は新たな視点を他者との交流やネットワークから得ようとする「非規範的視点」に関連すると考えられた。また、過去の成長体験表出度別に学び直し促進要因、および PWB との関連を調べたところ、表出が多い人ほど PWB が高かった。また、PWB が高い人ほど「地域・社会へ貢献」が高く、成長体験の表出が多い人は「人脈・仲間づくり」が高いことがわかった。ここから、「仕事スキル向上」にとどまらず、「地域・社会へ貢献」「人脈・仲間づくり」を学びに取り入れる重要性が示唆された。

次に、越境的活動のなかでも PWB との関連が強いことが想定される地域・社会貢献活動(以下、貢献活動とする)に着目し、20~70 代 900 人を対象にオンライン調査を実施した。その結果、積極的な学習行動をとる人ほど、貢献活動に関与していることがわかった。貢献内容に関する自由記述分析から、若年期では経験活用の意向、中年前期はネットワーク志向がみられた。特に貢献活動の意向者では自身の経験や能力を生かすという目標をもつことが、行動を促すと考えられた。

以上より、次のような支援の方向が示唆された。

- ・学ぶための視野を広げるような支援をする
- ・過去の体験から想起をさせるような支援をする
- ・自身の経験や能力を生かすことを促すような支援をする

### 3. 越境的活動とライフキャリア発達との関連(研究 2)

自己成長主導性は自身の成長プロセスに積極的かつ意図的に関与する概念であることから、ライフキャリア学習プログラムの評価指標になり得ると考えられた。自己成長主導性尺度(以下、PGIS とする)の特性と有用性を検証するため、就業状況にある成人 20~60 代を対象に異なるパネルによるオンライン調査(1 回目 608 人;2 回目 300 人)を実施した。

PGIS は「変化への準備」「計画性」「資源の活用」「積極的な行動」の 4 因子で構成される。PGIS が高いほど、越境的活動への関与が高く、ライフキャリア発達が促されていると仮定した。活動項目は、研究 1 で抽出された学び直し促進要因を踏まえて、「1. スキルや知識をアップグレードするなどの学び直し」「2. 地域や社会に貢献」「3. 人的ネットワークや交流の多様化」とした。回答は 3 件法とし、各活動の関与度に応じて 3 群(関与群・意向群・非関与群)に分類し、分散分析と多重比較を行った。その結果、いずれの活動においても PGIS は実施群が高く、次いで意向群、非関与群が有意に低かった。しかし、貢献活動の意向群では実施群との間に有意差がなく、PGIS が高くなる傾向がみられた。さらに、PGIS の因子別の特性をみていくと、年代別に有意差があった「資源の活用」では、20 代が高く、50 代が最も低かった。また、年代が上がるほど、学び直し行動とあわせて越境的活動を行う人は、「新しい経験に開かれた姿勢」が備わり、「変化への準備」が高くなる可能性が示唆された。

以上より、PGIS はライフステージや活動関与状況に応じた支援を可能にし、ライフキャリア発達の指標として有用であることが示された。

### 4. 越境的な相互作用が省察に与える影響(研究 3)

研究 1 で得た越境的環境を生かしたライフキャリア支援の示唆を踏まえて、ライフキャリア学習プログラム「コロミ」を開発した。プログラムはアイデンティティの発見へのプロセスとして、省察を促すことを企図しており、6 つのフェーズ(以下、Ph とする)で構成する。学習についての認知を高めるため、Ph1 ではワークシートに学びの観点を組み込み、誕生から現在までを俯瞰的にモニタリングするための Ph2、自身の能力や志向性、強みと感情のバランスを棚卸しする Ph3、それを起点にワークを行う Ph4 を設けた。参加者はここまでのワークを踏まえて、Ph5 で行動に向けての計画を作成し、Ph6 でプログラム全体の振り返りを行う。ワークシートは各フェーズに 1 枚、全 6 枚を作成した。プログラムの所要時間は参加ハードルを下げするため 2 時間半を目処とした。

プログラムの効果を検証するために、就業経験のある成人を対象に実践 2 回(15 人)による予備調査と実践 9 回(61 人)による本調査を実施した。予備調査では、Ph6 におけるリフレクションシートの外化は、記入するだけでなく、他者と共有することの有用性が示唆された。また、「資源の活用」は他因子と比べて変容が起りにくい傾向がみられたものの、メンバーの多様性とその変容に影響を及ぼす可能性が考えられた。そこで本調査では、年代とグループメンバー構成による PGIS の変容とグループワークの対話を音録し文字化したデータをもとに省察に及ぼす影響について検討した。その結果、プログラムの事前事後で PGIS の変容が全般的に大きかったのは 50 代であった。一方で、いずれの年代においても有意な変容がみられなかった因子は「資源の活用」であった。しかしながら、「資源の活用」は職種に多様性があるバランスグループに参加した企業勤務者では有意に向上した。さらに、他者との関わりをとおして発言された発話をグループ作用とし、抽出・コード化を行い、フェーズ別に出現数を調べた。その結果、グループ作用は「興味喚起」「感情表出」「省察促進」「試み誘引」に類型化され、「省察促進」「試み誘引」はフェーズ 6 で多く出現していた。

以上より、企業勤務者では自営業者が混じるなどメンバーの多様性が「資源の活用」に影響を及ぼす可能性が示唆された。また、プログラム全体の振り返りをグループ共有することは、参加者がプログラムをとおしてそれぞれのレベルで獲得した気づきや他者の省察プロセスを共有することでもある。このような活動は、「成長を促す関係性」を互いに認知する機会になり得ると考えられた。

### 5. おわりに

本論文における検討の結果、1) 学び直し促進要因には「仕事スキル向上」「地域・社会へ貢献」「人脈・仲間づくり」があり、学習行動をとる人ほど越境的活動に関与していた、2) 越境的活動に関与する人ほど、自己成長主導性が高く、ライフキャリア発達が促されていた、3) 越境的な相互作用が個人の省察を促すプロセスには、メンバー間の「多様性」や「差異」が影響することが明らかになった。

以上より、越境的な相互作用が個人の省察を促進した可能性が示された。また、越境的活動には「新しい経験に開かれた姿勢」の醸成や「成長を促す関係性」による省察促進のメカニズムが内包され、ライフキャリア発達に影響を与える可能性が示された。よって、ライフキャリア支援を目的とする生涯学習の場には、個と社会の両側面をもつ越境的活動が有用であることが示唆された。